

# ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(4)

～1998年：ICEは凍りついた～

吉田 和比古

## 0. はじめに

今回は、1997年の10月から1998年12月までの間、日本のテレビ・メディアが放送したドイツ社会・文化関連の番組を考察の対象とし、その内容を分析していきたい。これまでの過去3回の論考はかなり駆け足で進めてきたが、最近になり番組の録画収集・分類整理の作業がかなり進捗を見たので、今後はできるだけ一回の論考で1年分という形にし、将来的に検索を容易にする方向で進めていきたいと考えている。

さて、1998年のドイツ社会文化論的な出来事として特筆すべきは、一つは「高速列車事故」であり、もう一つはドイツ連邦議会の「総選挙 (Die grosse Wahl)」である。これら二つの出来事に直接的関連性はないが、現代ドイツ社会が抱える問題を浮き彫りにする大きな手がかりとなったことは指摘できる。前者の事故では、高度に発達した産業社会を基本的に支えている科学技術の脆弱さが露呈してしまった。言い換えれば「科学技術の安全神話の揺らぎ」である。犠牲者には哀悼の意を表するのみであるが、事故は効率性・快適性を追い求めた結果でもあったことを見逃すわけには行かない。もって他山の石とすべきであろう。「ハインリッヒの法則」というのがある。メディア論でしばしば利用される概念であるが、ひとつの大きな事故の陰には、そうした重大事故につながる30件の類似の事故が起きているというものである。

9月下旬に行われた「総選挙」では、ベルリンの壁崩壊の立役者の一人

で、ドイツ国民の悲願であった東西ドイツ統一を成し遂げたヘルムート・コール首相が、16年間続いた長期政権を維持し続投するのか、あるいは野党の社会民主党に政権の座を明け渡すのか、世界的にも注目された。結果は、与野党逆転であった。現在のドイツが抱えている社会的諸問題の多くは、日本にも共通するものがあり、日本としてもドイツは、あるときには先行事例としてまたあるときは反面教師として、機会あるごとに絶えず参照する価値が減少することはこれからもないだろう。

また、この年大きな話題をさらったのが、100年ぶりに行われるという「正書法 (Rechtschreibung; Orthographie)」改正の問題である。これには、賛否両論が渦巻いた。私事であるが、筆者がこれまで編集にかかわってきた3冊の「独和辞典」もその影響を免れがたく、発刊してから数年を待たずして否応なしに「旧仮名遣い」で書かれた本の中に入ってしまった。ドイツ語教育の現場でも、いまだに頭の切り替えができない状態であり、今回の改革が表記法上かなり不徹底であったと実感される。ドイツでは、つづり字の大幅な変更は、古いつづりでドイツ語教育を受けた親から子供への教育権を奪うものだという訴訟があったそうであるが、連邦憲法裁判所はつづり字改定は合憲であるという判断を下し、法律的なお墨付きもついていたため、もはや誰も手をつけられない問題とはなった。

日本の番組では、やはりナチズムに関連する番組が多く見られたが、中でも特筆すべきは、「金髪のヨハネス～ナチスにさらわれた子どもたち～」(1998年9月放送)であろう。これはNHK独自の取材になるもので、大変中身の濃い番組であった。ここで扱われたテーマは、ただ単に、ナチズムの過去の「人種の優性政策」の持つ暴力性・非人道性を糾弾しているだけでなく、現代の最先端の「生殖医療技術」が本質的に持つ問題と一直線に結びついているという点で、ナチズムの理念と実践は、決して歴史の闇に葬るべきではない現代の問題であることも強く訴えかけている。

## 1997年〔平成9年〕～続き～

219. 「農業ビッグバン (2)農村をどう保全するか」〔1997年10月8日・  
『ETV 特集』・45分〕

1992年5月、農産物貿易の完全自由化を迫る「ウルグアイ・ラウンド合意」に対してEC(ヨーロッパ共同体)は、大胆な農政改革を行った。それは農産物の価格を大幅に引き下げ、その代わりに多額の補助金で農家の所得を補償するという画期的なものであった。この改革はEU(ヨーロッパ連合)にも引き継がれ、世界の農業関係者に大きな衝撃を与えている。EUのフィッシャー農業委員は、次のように語る。「農業に国際競争力をもたせ、農家の収入を補償して農村環境を保全します」。こうした改革を積極的に推し進めているのがドイツである。ここでは補助金政策とともに生産基盤である農地の大がかりな整備を行っている。これは国際競争力をつける一方で、国土の荒廃を防いでいくための長期的な戦略である。番組では農業の国際化の中におけるドイツの具体的な取り組みを紹介する。「農業ビッグバン」というのは、ウルグアイ・ラウンド以降の農業を取り巻く環境変化を意味する象徴的な言葉である。ドイツと日本は農業環境が比較的近いと言われている。すなわち比較的小規模で家族単位であること、農地は分散して小区画、急傾斜地などの条件不利地域が多く存在するといった点である。番組ではまず、バイエルン州のベルニッツ村(人口1500人)の土地区画整備の取り組みを紹介する。この村の事例からもわかるように、かつてドイツの農村も後継者不足や過疎化という問題を深刻に抱えていた。そうした中で、分散した農地を整理統合・ほかの農家との等価交換の「換地(土地の流動化)」を通じて大型機械の導入が可能となり、生産効率の上昇が可能となった。こうした農地整備を推進する機関としてドイツでは「農地整備庁」が行政機能を担っている。バイエルン州農林省のマリアンネ・デムル次官は番組の中で次のように語る。「土地利用については、公共の利益と農家

の利益が可能な限り話し合わせ、誰もが納得のいく解決策が模索されます。まれに裁判になることもあります。農家の多くは整備事業に賛同しており、申請が絶えません。この番組でも、社会システムを効率的に構築するというドイツ人の気質が色濃く見られるのがとても興味深い。土地の私有意識や身内意識が強い日本の農村では、土地の交換や貸借といった社会的行為は、おそらくドイツのようにうまくはいかないであろうことは十分に想像される。〔司会：町永俊雄、ゲスト：千賀裕太郎(東京農工大学)〕

220. 「ドイツ・ファンタスティック花街道」 [1997年11月11日・「ヨーロッパ・ガーデニング紀行」・BS2・50分]

「ドイツ・ファンタスティック街道」は、ドイツ南西部の温泉保養地として有名なバーデン・バーデンを北の基点として、中世に栄えたポーデン湖畔の町コンスタンツにいたる、ドイツに数多くある観光街道の一つである。途中、大森林地帯「黒い森」をぬって続く街道沿いの町や村は、花と緑に包まれ、豊かな歴史と文化が根付いている。女優の左時枝は自ら生け花をたしなみ、園芸にも造詣が深く、また花の絵を描くという花の大好きな女優である。彼女はかねてからこのファンタスティック街道を訪ねてみたいと願っていた。左氏はまず、ポーデン湖に浮かぶドイツ最大の島マイナウ島を訪ねる。島は別名「花の島」とも呼ばれ、年間160万人、日本からは年間3万人の観光客を集めている。。氏はさらに、コンスタンツの市街、カルフ(ヘルマン・ヘッセ生誕の地)、バーデン・バーデンなどを訪ねて回る。途中訪れたザスバッハヴァルデンという小さな村は、「花の村」として知られている。30年前に花作りコンテスト「くわが村を美しく>コンクール」で優勝したが、それをきっかけとして花を生かしたリゾートの村として出発。村全体で2000の部屋を持ち、5000人が宿泊でき、観光収入が農業収入を上回るという。注目すべきは、村では花を生かすために「景観条例」を独自に制定し、伝統的な町並み保存と連動させた村おこしを行っている点である。また番組後

半で紹介される街道沿い最大の産業都市シュツットガルトにおける都市緑化の具体的な取り組みにも大変興味深いものがある。

221. 「もうひとつの『車輪の下』～ヘッセ3万5千通の手紙～」〔1997年11月11日・BS2・50分〕

ドイツの大きな書店では、今でもヘルマン・ヘッセのコーナーが設けられ、世代を超えた幅広い人気を集めている。ヘッセは生前に世界中から送られてくる読者からの手紙に絶えず返事を書き続けた稀な作家で、その数は3万5千通に及ぶという。ヘッセはなぜこのように数多くの手紙を書き続けたのか、彼が生きた激動の時代とのかかわりを縦軸として、番組はヘッセの生きざまをたどっていく。現在、出版社に編集者として勤めるフォルカー・ミヘルスさんは、自宅にヘッセの手紙コレクションを持っているヘッセ研究者でもある。ヘッセとの出会いは、少年時代に文学を志したが、両親はそれを認めなかった時、ヘッセの『車輪の下』の主人公に自らを重ねたミヘルスさんがヘッセに直接手紙を出したことから始まる。同じように、ヘッセと文通する機会に恵まれた日本人がいる。広島市在住の四反田五郎さんは、1951年から1962年まで12年間の文通を続け、彼の手元には60点の郵便物が残されている。ヘッセはドイツと同じ敗戦国日本の青年に手紙を通して力強い励ましをしたという。ミヘルスさんは、ヘッセの手紙に込められたメッセージを次のように分析している。以下、番組から引用する。「ヘッセはイデオロギー的な方法で人間を変えることを拒否しました。ヘッセが重視したのは一人一人が自分の資質にあった道を見出すことでした。それによって大衆の異常心理〔ナチズムという大衆運動を示す：筆者注〕に抗（あらが）うことができたのです。人は周囲の反対に負けない勇気を持たなければなりません。エゴイズムからではなく、自分の中にある可能性を実現したとき、誰よりも社会的になれるのです。気乗りしないまま普通の出世にかかわったり、無理をして世間に適応しようと勤める人には、周りの人に本当の喜びや感動を伝えることはできないのですからね。〔教育・国家・イ

デオロギー」一人々を否応なしに巻き込んでいく巨大な車輪にヘッセは終生反抗し続けた。『3万5千通の手紙』、それはある意味では読者一人一人に宛てて書き続けたもう一つの「車輪の下」であったということもできるだろう。

222. 「ドイツ・ヘッセのささやきが聞こえる」〔1997年11月22日『世界・わが心の旅』・NHK・BS2・45分〕

漫画家の池田理代子(1947-)は、23年前に日本中の女性の心を捉えた『ベルサイユのばら』の連載を終え、その年の10月に一度ドイツへ取材旅行にでかけたことがある(当時26歳)。その時彼女は、ドイツ南部の町レーゲンスブルクにやってきた。当時初めてヨーロッパに出かけた彼女はドイツ文化に強く心を動かされた。とりわけ石造りの文化の重厚さに圧倒され、改めてヨーロッパ文化の勉強を始める。そしてその過程で一つの作品が出来上がる。やがて代表作の一つとなった『オルフェウスの窓』は、レーゲンスブルクの音楽学校が舞台となっているが、ヘッセの「車輪の下」を強く意識して描かれたもの。しかしそのころ漫画表現に限界を感じ、次第に少女漫画に決別していく。彼女は社会通念としてのジェンダーと衝突したり、帰属性の喪失という人生面での大きな揺らぎの時期でもあった。少女漫画への決別から10年、自らの搜索の原点に立ち返り、新たな表現方法の模索のために、今回再びドイツへ、そして強く影響を受けたヘルマン・ヘッセの足跡をたどる旅に出る。池田氏は、ヘッセの生まれた町カルフを皮切りに、ヘッセが14歳の秋に入学したマウルブロン修道院の神学校や、さら「黒い森」の中の大学都市テュービンゲンなどを訪ね歩く。そして、かつて自らドイツ語を学んだローテンブルクのゲーテ・インスティトゥートを訪ね、自分が住んでいた下宿屋に向かう。そこでは現在4人の若い日本人女性が下宿していた。旅の最後に池田氏は、ヘッセ終焉の地であるスイスのルガノに向かう。ヘッセをめぐる旅から池田氏は、これから自分の進む道の模索を試み、その手がかりを感じ取ろうとする。音楽学校に留学しソプラノを学ぼうと

したり、実年齢にこだわらず、たえず自らの未知の可能性を発見しようとするその意欲的な姿には、同世代の一人として強い共感を覚える。

223. 「二つの民族・二つの故郷～ポーランド・シレジア地方～」 [1997年11月24日・BS2・60分]

ヨーロッパ東部のシレジア地方〔現在ポーランド領〕はヨーロッパ有数の穀倉地帯で、一面の小麦畑が広がっている。中心都市レグニツァを流れるナイセ川の流域は、古くから民族対立の舞台となってきた。今、川をはさんでドイツとポーランドが国境を接しているが、戦後の国境が確定したのは、東西ドイツ統一後（1990）のことである。ナイセ川をはさんで19世紀に作られた「バート・ムスカウ庭園」も戦火にまきこまれ、川にかかる橋は戦後破壊されたままである。1997年9月に両国政府代表がこの庭園を訪れ、ドイツはシレジア地方の領有を断念し、さらに両国で共同で再び橋を架けることに合意した。現在両国では、過去の不幸な歴史を乗り越えようという新しい動きが起きている。

ユルゲン・グレッツェルさん（57歳）は、金や錫（すず）などを採掘する鉱山技術者として、生まれ故郷のシレジアに戦後とどまった数少ないドイツ人の一人である。だが、彼らの多くは共産主義時代に迫害を受けたため、身分を隠したり、ポーランドの国籍を取得したりした。番組は、グレッツェルさんの戦後史という形で、シレジア地方の過去の歴史、そして社会主義政権が崩壊した現在の両国の新しい動向について紹介される。彼は現在国営のバス会社の経営責任者である。父は、戦前シレジア地方で300haの土地を所有しており、製糸工場や社員寮といった不動産はすべて戦後の社会主義政権に没収された。彼は家族以外のものはすべて失ったと語る。ナチズムという国家的暴力のツケを多くのドイツ人は、個人的に払わされたが、彼もその一人である。現在のシレジア地方で、ドイツ人は「少数民族」である。ドイツ系の子供の大半はポーランド人との間に生まれた。だが、若い世代にドイツ人固有の文化的伝統を継承していこうという新しい試みも始まっている。

224. 「シューベルト～響きあう魂の調べ～」 [1997年11月29日・「世界・わが心の旅」・NHK・BS2・45分]

音楽の都ウィーンに生まれたフランツ・シューベルト (Franz Schubert)。1997年はシューベルト生誕200年に当たる。歌曲王として有名なシューベルトは、またピアノの連弾曲を数多く残した作曲家でもあった。京都に住むピアニストのエルンスト・ザイラー (Ernst Seiler) さんは、奥さんの和子夫人とともに25年にわたりピアノの連弾を行っている。ザイラーさんは、シューベルトがどのような思いでピアノ連弾の名曲を生み出したのか、その手がかりを得るために、作曲の舞台であったウィーン、そしてスロバキア共和国のセレスを目指す。

225. 「市民の20世紀 (25) 21世紀への道～崩壊する東西の壁」 [1997年12月13日・BS1、“Peoples Century (25) People Power”、製作：BBC/WGBH 英・米 1997年・50分]

1989年11月9日、ベルリンの壁に設けられた検問所に東独市民が大挙押し寄せた。検問所は開けられ、東ベルリンの市民は、西ベルリンに自由に出ることができるようになった。民主化を目指した東独市民にとって、これはまさしく夢のような出来事であった。社会主義の不自由な抑圧的状况をただ受け入れるしかなかった民衆は立ち上がった。しかも、一発の銃弾も発射されずにである。 [インタビュー：ハーラルド・イエーガー (元東独国境警備兵)、マイク・フレーネル (東独市民)]。共産主義諸国にとって、東西両陣営を隔てる鉄のカーテンとベルリンの壁は、西側の退廃した文化を食い止める防波堤であり、社会主義を守るための「守護の壁 (Schutzmauer)」であった。しかし、西側文化の奔流は有刺鉄線を軽々と飛び越え、多くの映像情報はテレビの電波に乗って東側に届いた。社会主義こそ地上の楽園というように、政府のプロパガンダを信じ込まされてきた人々は、次第に自分たちの現状に疑問を抱き始める。日用品の慢性的品不足により、西側からひそかに持ち込まれた物資は闇市で高値で取引された。だが、市民は自由に意思表示をすることが



できなかった。市民生活のあらゆる面で、国家は秘密警察を介して監視の目を光らせていたからである。政府を批判した市民は、密告により逮捕され厳しい刑罰が科せられた。マイク・フレーネルは政府を批判するビラをまき秘密警察に逮捕されたが、統一後彼は自分の国がいかに多くの個人情報把握していたかを知って愕然とする。

番組の後半でインタビューに登場するベーベル・ラインケさん(東ベルリン市民)は、かつて壁崩壊の夜、「一度でいいからあのブランデンブルク門をくぐってみたい。」と泣き叫んだ有名な記録映像に登場するその人である。周りに集まった市民が彼女の味方をしたため、東独の警察が彼女の肩を支えてゆっくりとブランデンブルク門のほうへ歩いていく光景は、壁崩壊の歴史の中で忘れがたい場面の一つである。

⇒関連映像資料：32.「喜びと自由への賛歌～ベルリンの壁崩壊～」〔法政理論〕第33巻第3号 p.98-99, 2001年〕

番組では、東独以外にポーランド、チェコ、ルーマニアそして社会主義国の盟主国ソ連における政権の崩壊過程を丹念に紹介する。ソ連では、ゴルバチョフが若い指導者として登場し、いわゆるペレストロイカ(世直しと情報公開)により、市民の政治参加を積極的に進めるが、市民の目には所詮は共産党の延命策と映り、ゴルバチョフの改革路線は急速に国民の支持を失っていく。軍隊のクーデターにより、ゴルバチョフは静養先で一時軟禁状態となり、自らも死を決意したという。だが軍部のまきかえしはすぐにほころびを見せ始める。改革の急先鋒に立ったボリス・エリツインは、市民に対し軍隊と旧共産党への徹底抗戦を呼びかける。軍隊は市民の鎮圧に動かず、クーデターを指揮した保守派は敗退する。70年ぶりでクレムリンには赤旗の代わりにロシアの三色旗がひるがえった。人々は今度は、「民主主義・資本主義」という新しい神を信仰の対象に選んだ。番組の最後では、台座から取り外されたレーニンの銅像がヘリコプターに吊るされて運ばれていく俯瞰場面で終わる。このシーンは、明らかにかつてのイタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニの名

作『甘い生活 (La dolce Vita)』の冒頭シーンを連想させる。フェリーニは、ヘリコプターでキリスト像を吊り上げることにより、既成の価値観に対する異議申し立てを行ったのであった。

226. 「ケーテ・コルヴィッツ美術館」〔1997年12月18日・『世界美術館めぐり』・BS1、語り：加賀美幸子・30分〕

ドイツ第二帝政時代から、第一次、第二次世界大戦という激動の時代を生き抜いたケーテ・コルヴィッツ (1867-1945) は生涯にわたり、社会の不正や貧困、人々の苦しみや悲しみを描きまた刻み続けた。ドイツ統一から7年、ベルリン一のショッピング街、通称「クーダム通り」にはいつも多くの人々が絶えない。ケーテ・コルヴィッツ美術館は、このクーダム通りから少し西に行って左折したファザーネン通り (Fasanenstr.) にあり、あたりには高級ブティックや画廊も立ち並ぶ閑静な通りである。19世紀末この地区で最初に個人住宅として建てられた建物は第二次大戦で大きな被害を受けた。しかしその後文化財の指定を受け、ネオバロック様式の瀟洒 (しょうしゃ) な元の姿に修復され、美術館として開館する。この美術館は、画家であり収集家でもあったハンス・ペルス・ルースデンをはじめとするコルヴィッツのファンが彼女の作品を展示したいという長年の夢を果たすべく、この建物を借り受けてようやく開館にこぎつけた。美術館としてオープンしたのは1986年5月30日のことである。壁崩壊の3年前にあたる。中には入るとそこにはコルヴィッツの写真・ポスター・版画・素描などがずらりと並んでいる。1867年、現在のロシア領である東プロイセンのケーニヒスベルク (現在のポーランド、ダンツィヒ) に生まれる。ゲアハルト・ハウプトマンの戯曲「織工 (Die Weber)」に触発されて製作されたシリーズ「織工の蜂起」(1897) で版画家としての地位を確立した。この作品は、イギリスに遅れて19世紀に始まるドイツの急激な産業革命の過程で生ずるさまざまな社会問題や貧困・生活格差など社会の矛盾を鋭く描いたものである。この作品は翌年「大ベルリン美術展」に出品されたが、そこでは賞

賛と非難の嵐を巻き起こした。旧東ベルリンには現在コルヴィッツ通りと命名された通りがあるが、かつて彼女はここで結婚生活を始め、二人の子を育て上げる。通りに接して「ケーテ・コルヴィッツ広場」があり、そこにはコルヴィッツの小さな銅像が立ち、今もなお広場で遊ぶ子供たちを静かに見守っている。ケーテ・コルヴィッツ美術館は、第二次世界大戦で破壊されたままの姿をとどめるカイザー・ヴィルヘルム記念教会からも歩いて10分足らずのところの位置しているので、ベルリンに行く人はぜひ訪れるべき場所の一つである。また、番組で紹介されるウンター・デン・リンデン通りに面する「新警備所 (Neue Wache)」には、彼女の制作になる「母子像」が展示されている。

⇒関連映像資料：「ケーテ・コルヴィッツ～母たちの肖像～」(1996年12月15日・『日曜美術館』・ETV)

## 227. 「ベートーヴェンの偏頭痛」[1997年12月23日・NHK・50分]

現代日本の代表的なジャズ・ピアニスト山下洋輔は、ベートーベンに強く惹かれる理由の一つとして、ベートーベン自身がピアノの即興演奏家であった点を上げている。そして山下はその点に、ベートーベンの音楽性と現代のジャズとの相似性を見出している。できれば一度実際にあつ直接話をしてみたいという、山下の実現不可能な願望は、バラエティ番組というテレビ・ジャンルの枠組みの中で、一つの可能性として実現した。俳優の増岡徹ふんする「野暮舌洋介」と佐藤晋が扮する「ベートーベン」の絶妙な話術の掛け合いが、この番組の骨子になっている。二人は、現代日本の都会のとあるバーで出会う。ベートーベンの音楽がなぜ多くの日本人に受け入れられるのか、という問題をめぐる二人の対話が、はからずも日本人の精神文化論へと展開していく点は、この番組の構成に参加した山下の音楽哲学の反映と見ることができるだろう。

⇒関連映像資料：92. 「ベートーベンの世界～ピーター・ユスチノフが語る～」[1993年2月12日 ZDF制作、『法政理論』第33巻第3号 p. 128-129, 2001年]

228. 「苦悩から歓喜へ～‘第九’ 誕生の旅～」 [1997年12月24日・NHK・50分]

1827年、ルートヴィヒ・ファン・ベートーベン(Ludwig van Beethoven)は56歳と3ヶ月の生涯を閉じた。死の3年前に作曲したのが「交響曲第九番ニ短調〈合唱つき〉」である。いわゆる「歓喜の歌」として知られるこの交響曲にベートーベンはどのような思いを託したのか。映画監督・篠田正浩の旅は、ベートーベンの銅像が立つボンのミュンスター広場から始まる。ベートーベンは18歳の頃、ボン大学で哲学の聴講生をしていた時、フランス革命の報に接する。おりしも広場では、ドイツ政府の医療費予算削減に反対する集会が行われていた。篠田は、ベートーベンの銅像の下でこうした市民の政治的要求という風景はとても似つかわしいと指摘する。ベートーベンは、一面においてフランス革命の申し子でもあり、彼はボンでフランス革命に出会い、音楽を特権貴族の私有物としてではなく、民衆の芸術にしようと考えた。彼の民衆への愛が「第九」に到達したと、篠田はさしあたり番組の冒頭で結論を提示する。ボンは、街の東側をライン川が緩やかに流れている。18世紀の末、多数の小国と自由都市に分かれていたドイツの中でボンは文化的香りを持つ都市として賑わった。当時のボンは、人口1万人ほどの町であった。歴代の領主が学問や文化の振興に力を注いだため、ボンにはさまざまな人と情報が集まり、封建的な政治風土の中にありながら自由な気風がみなぎっていた。その旧市街の一角に「ベートーベンハウス (Beethovenhaus)」と呼ばれる記念館がある。通りの雑踏から建物の中に入ると、その中庭の陽だまりには、いまだにベートーベン時代の空気が漂っているような錯覚すら覚える。ここで生まれたベートーベンは、音楽の才能を領主に見込まれ、経済的援助を与えられてオーストリアのウィーンへと向かい、ハイドンの元で音楽の勉強にいそしむ。モーツァルトはベートーベンがウィーンに来た前の年に亡くなっていた。篠田も、ベートーベンの足跡をたどるためボンからウィーンへと向かう。そして、体制

批判を明確にした文豪シラーの作品の影響や、ウィーン時代のベートーベンの生きざまをたどりながら、「第九」という形で結実するベートーベン芸術の本質に迫ろうとする。なお、ボンの中央駅から線路に沿って10分ほど歩いたところにある大きな墓地には、ベートーベンの母マリア・マグダレーナの墓がある。

1998年〔平成9年〕

229. 「愛の詩人ゲーテ ヨーロッパ的知性の再発見」〔1998年1月から3月【NHK 人間大学】・30分×12回 講師：小塩節〕

「ゲーテは、ドイツの生んだ最もスケールの大きい、明るい詩人だった。その詩の中には世界中で今も愛読されているものが、数え切れないほどある。ヨージン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) は、小説の中にも多くの名作を残したし、エッセイ、評論、自伝文学、紀行文学、戯曲（とくには悲劇『ファウスト』）の作者であったが、実はそれだけではない。弁護士、行政官、一国の大臣を務め、劇場監督、自然科学者であって画もよくした。いろいろな、いやあらゆる分野に多彩な才能を発揮し、何に対してもよい意味の好奇心を燃やして取り組んだゲーテは、いわばミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチと同じような、普遍総合的なヨーロッパ的知性の人だった。自ら科学者でいて、近代的自然科学が進歩すればするほど自然破壊や公害を引き起こすことを的確に予見し、「自然への畏敬」を訴えてやまなかった。自然への深い「愛」である。豊かな人生を楽しむ『生活者』であった。（中略）多面的でしかも人間性豊かなゲーテのありようは、EU 統合を控えたヨーロッパで改めて見直されている。詩作品をいくつも紹介しながら、彼の生き方と思想を読み解いていこう」（以上は、番組テキストの『開講の詞』からの引用）。以下は、講座の一回ごとのタイトルである。①自由都市の中の生い立ち、②青春の書『ウェ

ルテル』、③大臣・ゲーテ、④「ファウスト」1～ヨーロッパの人間～、  
 ⑤『ファウスト』2～罪と罰～、⑦旅人の夜の歌、⑧南の国イタリア、  
 ⑨ロマン主義とゲーテ、⑩自然の生命～自然科学とゲーテ～、⑪芸術・  
 文学に生きて、⑫「もっと光を！」～晩年の生き方～。

230. 「EU ヨーロッパの統合～EC から EU への道～」〔1998年2月9日  
 ・『歴史で見る世界』・講師：木村靖二・ETV・30分〕

従来、ヨーロッパの統一は、ナポレオンやナチス・ドイツに典型的に  
 見られるように軍事力を基盤とした「覇権主義」的なものであった。こ  
 れに対し、EU の成立の背景には4点の理由があげられる。それは、(1)  
 二つの世界大戦への反省、(2)冷戦下のヨーロッパの東西分断、(3)ヨー  
 ロッパ経済の疲弊、アジア・アフリカの植民地の独立、(4)ヨーロッパの安  
 全保障への不安、という4つの点で、この点を踏まえた上での軍事力を  
 伴わない平和的試みとして評価できる。以下では統合の過程を年表形式  
 でまとめる。

1948年 「西欧」の結成（参加国：イギリス、フランス、ベネルクス三  
 国<ベルギー、オランダ、ルクセンブルク>）

1949年 NATO（アメリカを含めた軍事同盟）調印、ヨーロッパ評議  
 会（経済協力と人権擁護を目的）チェコスロバキアの社会主義  
 化とベルリン封鎖による危機感。

1952年 「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」発足（参加国：フランス、イタ  
 リア、西ドイツ、ベネルクス三国）フランスの外務大臣シュー  
 マンが提案したシューマン・プランに基づく。過去にしばしば  
 戦争の火種となった北西ドイツのルール地域（Ruhrgebiet）  
 の石炭と鉄鋼を共同管理するもの。不戦共同体的性格を持つ。

1957年 ローマ条約調印、ヨーロッパ経済共同体（EEC）、ヨーロッパ  
 原子力共同体の成立（軍事に結びつきやすい原子力を共同管理  
 する目的とする）。

1967年 「ヨーロッパ経済共同体・ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体・ヨーロ

ップ原子力共同体」が「ヨーロッパ共同体 (EC)」に統合される。

- 1972年 「拡大 EC」成立 (フランス、イタリア、西ドイツ、ベネルクス三国、デンマーク、イギリス、アイルランド)。
- 1975年 「ヨーロッパ理事会の設置」。
- 1979年 「ヨーロッパ議会」の直接選挙始まる。1980年代に入ると、アメリカと日本の経済的地位の上昇により、統合への機運が加速化する。
- 1986年 単一欧州議定書調印 (統合へのより具体的なグランドデザインが固まる)。
- 1991年 「マーストリヒト条約」で EU 成立。経済統合、通貨統合、政治統合へ歩み出す。

EU の課題は、加盟国拡大にともなう地域格差、農業問題、低賃金国への産業移転、失業問題、移民問題、地域主義(排他的ナショナリズム)の台頭、環境保全などと数多くある。しかし、EU はこのようにさまざまな克服すべき問題を内包しながらも、19世紀ヨーロッパで成立した国民国家という政治的枠組みをどのように乗り越えて、新たな文明のシステムを創造していくことができるかという歴史的な実験でもある。

### 231. 「生命誕生の現場～最新技術がもたらす重い課題 (1)人間改良を目指す男たち」[1998年2月2日・ETV・45分]

ナチスのユダヤ人に対する人種差別政策や、ドイツ人も含めた精神障害者に対する社会的コスト削減のための安楽死政策は、ナチス以前、ヨーロッパの19世紀に誕生した「優生学思想」の延長線上にあり、そしてこの思想は現代の医療倫理と技術、とりわけ「生命操作」が内包する問題につながっていることを知る、貴重な番組である。番組の冒頭では、日本の「不妊治療」専門の病院の紹介から始まり、「エンブリオロジスト」と呼ばれる顕微授精が詳しく紹介される。人類の歴史の中で、神の手のみによるとされたと言われた「生命の創造」は、現在では医療テク

ノロジーの進歩ですでに人間の手で可能となった。人間が作り出せるようになった受精卵から遺伝子を取り出すと、生まれてくる生命の未来予測が可能となり、やがてはかなりの種類の遺伝性の病気の予測も可能となる。と同時に、こうしたテクノロジーの進歩は、生命の「選別」が(つまり裏返しにいうと「排除」)が可能になることを意味している。かつてのナチスのユダヤ人抹殺計画を始めとする生命の「選別」は、いまや個人の意思で実行可能となっている。本シリーズのその他の回のテーマは以下のようになっている。(2)「生命の質」検査社会の到来、(3)人工臓器・胎児細胞利用の衝撃。

⇒関連映像資料：「生命の未来図」第3回「ヒト・ゲノム解読の衝撃」、第5回「生殖医療のもたらしたもの」〔2002年2月～3月〔「NHK人間講座」講師：柳沢桂子（サイエンスライター）〕

232. 「ケルン大聖堂の涙～酸性雨被害からの再生～」〔1998年3月8日・『素敵な宇宙船地球号』第37回・NT21・製作：テレビ朝日・30分〕

ヨーロッパの文化の歴史の中では数多くの建築物が生み出されてきた。だが、近年になり大気汚染や酸性雨によって、そうした欧州文化の「粋(すい)」が破壊されつつある。ケルンの象徴であるドーム（大聖堂 Kölner Dom）もその一つである。石像は、酸性雨や微生物による無数の穴が開き、今にも崩れそうな状況になっている。プラハのカレル（チャールズ）橋の被害も深刻で、有名な橋の上の30体の石像は大気汚染によりすっかり黒ずんでしまっている。番組では、この「バンダリズム(文化破壊)」から貴重な文化遺産を救うために各国でさまざまな試みがなされている現状が紹介される。具体的には、侵食された穴をアクリル樹脂で塞いだり、石の表面の黒ずみは、レーザー洗浄を行ったりする工夫がされている。＜ケルン（Köln）について＞ドイツ北部に位置する歴史を誇る文化都市。ケルンの語源のコロニア（植民地）に由来する。紀元前50年ころからローマ帝国直属の都として栄え、中世にはドイツ最大の都市としてハンザ同盟の一翼を担う経済都市でもあった。第二次世界



大戦では市街地の大半が破壊されたが、戦後見事に再建された。ドーム(大聖堂)は、ケルンの代表的なゴシック様式のカトリック寺院で、高さは「霞ヶ関ビル」よりも高い157メートル、奥行き・幅もそれぞれ144メートル。1248年の起工以来600年の歳月をかけて1880年に完成した。

⇒関連映像資料：「ケルン大聖堂」[2001年9月16日・『世界遺産』]

233. 「ヴァイマールとデッサウにあるバウハウスとその関連遺産群」[1998年3月15日・『世界遺産』・BSN<TBS系列>・30分]

バウハウスは、20世紀の建築・美術におけるモダニズムの源流であり、モダンデザインの「ゆりかご」とも言われている総合美術学校である。1926年にデッサウで作られた最も有名なものはドイツが生み出した名機と言われる「ユンカース」である。飛行機技師フーゴ・ユンカースが作り出したこの航空機シリーズは、かもめのように主翼が一度下にくびれてまた上に向くというきわめて独創的な形態をしている。もちろん、第二次世界大戦のヨーロッパにおいて、ユンカース急降下爆撃機「ストゥーカ(Stuka)」の爆音に多くの市民が恐怖におびえたという事実も同時に想起しなければならないだろう。さて、バウハウスは建築家グロピウスが中心になって開いた学校である。建築だけでなく、美術、写真、映画、デザイン、舞台設計など広く造形にわたる新しい総合教育の先駆的試みを行った。当初はワイマールで開校したが、1924年デッサウに移った。当時のデッサウ市長であったフリッツ・ヘッセは、ワイマールを追われて行き場に困っていた芸術家集団を迎え入れ、土地と資金を提供した。1926年建てられたバウハウスの校舎は、一面のガラスウォールで作られ、たちまちセンセーショナルな反響を呼び起こした。世界各地から訪れた見学者は、巨大なガラスの立方体に間違いなく「未来の建築」を見た。ユネスコの登録は1996年であるが、これは数少ない「20世紀の世界遺産」のひとつとなっている。

昭和の初期、日本の女性デザイナーの先駆者としてジャーナリズムの寵児となったのが山脇道子である。彼女がドイツ留学を決め、横浜港を

船出したのは1930年、19歳の春だった。若き建築家の夫である山脇巖に同行した道子は、バウハウスに入学を認められた日本人初の留学生であった。実験精神にあふれたバウハウスの活動は、第一次世界大戦の終結とともに始まり、わずか14年間の活動の後、1933年ナチス政権誕生の年に解散を余儀なくされた。ナチスは、バウハウスを共産主義者の牙城と決め付け、その活動を「退廃芸術」として排斥したためである。戦後の廃墟の中で作られた西ベルリンの建築物には、バウハウスの精神が読み取れるものが含まれている。初代校長グロピウスが発表した「バウハウス宣言」は次のように始まる。「すべての造形活動の目標は建築である」。そしてその精神は第二次世界大戦後のベルリンに見られるように、一度火の洗礼を受けなければならなかった。そして戦後新たに作られたベルリンの建築物を通して、バウハウスの精神が再生したといえる。

(英語名：Bauhaus and its sites in Weimar and Dessau、登録年1996年)

⇒参考新聞資料：「バウハウス～多様な造形教育の先駆～」池内紀(『読売新聞』2000年2月20日)

⇒参考映像資料：172. 「すべてはバウハウスから始まった」[『法政理論』第34巻第1・2号 p.57-58, 2001年]

⇒参考映像資料：121. 「建築家ブルーノ・タウト～ユートピアを求めて～」[『法政理論』第33巻第3号 p.146-147, 2001年]

⇒参考施設：「バウハウス展示館(ベルリン)」'Bauhaus-Archiv Museum für Gestaltung' 地下鉄ノレンドルフプラッツ(Nollendorfplatz)下車、徒歩10分)

234. 「ナチス秘密情報戦～元英国機密情報員は語る～」[1998年4月15日・BS1・制作：BBC 1997年・50分]

第二次世界大戦において、連合軍を勝利に導くために歴史の影の部分で戦った多くの人々がいる。その中にナチスと闘った数千人に上る英国機密情報部員が含まれている。番組は、大戦中に彼らが命がけで撮影し

た記録フィルムの紹介から始まる。彼らは、日は当たらないが、しかし重要な自分たちの戦いを後世に残そうとしたのである。機密情報部員の志願者たちは、英国内の秘密基地で厳しい訓練を受けた後に、破壊工作、通信技師、列車や通信網の破壊、またナチスに対するレジスタンス〔抵抗〕運動の組織者となるべくヨーロッパ各地に空輸され、パラシュートで降下した。もちろん、逮捕された場合の拷問による自白を避けるため、自殺用の毒薬も携えて行った。番組では、過酷な戦いの中で生き残った7人の下機密情報部員のインタビューで構成される。彼らの証言から、偽名、偽造旅券、外国語能力、そしてひたすら自分以外の他者を演じ続けることの不断の緊張感に耐え続けるためには、かなりの忍耐力が必要とされることが見て取れる。さらに、イギリスのドキュメンタリーの特徴ともいえる「サスペンス・タッチ」のきいた編集・構成が評価できる。番組の中で取材に応じた女性情報部員ローズ（ファーストネームのみ）さんは、祖国フランスでの活動を希望し、無線技師としてパリへ送られた。周囲には危険な裏切り者も多くいた。彼女は1944年6月6日の連合軍の「ノルマンディー上陸作戦」の際、移動する軍隊に対する妨害工作を行い、ゲシュタポにつかまると、自白をせず強制収容所に送られることになる。そして彼女は収容所への移送途中で脱走し米軍に助けられる。元機密情報部員の戦争後、社会生活への復帰にはかなりの時間がかかった。それでも、あの頃はもっとも充実した日々であったし、今でもあの波乱に富んだ日々が懐かしいとローズさんは語っている。

235. 「ベルリン～国家枢要の人材を～」〔1998年5月5日・『NHK人間大学：都市と大学の世界史～新しい大学像を考える～』講師：樺山紘一・ETV〔期間：4～6月〕・各30分〕

ドイツには現在約60の大学があり、ほとんどが国立・公立であるが、かつての政治の中心であったボン、あるいは新首都のベルリンの大学がヒエルラルヒーの頂点に立つということはない。ドイツ連邦共和国自体が、政治上は平等な権利を持つ諸州の連合であるように、またベルリン

を除いて数百万の人口を擁する巨大都市が存在しないように、大学についても多数の同格者が競い合う綺羅星（きらぼし）のように散在するという理想的な形態である。番組では、ベルリン大学（フンボルト大学）の19世紀初頭における創設のいきさつを概観しつつ、大学と国家政策との関連性を展望する。現在の日本の大学をめぐる状況を考える際にも示唆に富む歴史をフンボルト大学は有している。番組の講師樺山氏は、開講に当たって大学の論じ方について次のように述べている。「現在の大学の機構や実情を説明し、分析するのも一つの方法であろう。また21世紀を迎えて急速に変貌する大学のあり方を予言したり、提言したりするのも、無意味ではあるまい。だが、ここでは世界の隅々にまで普及した大学という制度や慣行を、いったんその成立と展開の歴史に立ち戻って取りざたしようとする。日本に限らず、世界にあまねく広がった大学について、その歴史を追い求めてみたい」。日本社会における構造改革の名の下に、さまざまな形で制度疲労が噴出する中で、大学も例外でありえず、対症療法的にシステムをいじくり回すことに拘泥している昨今、この番組のコンセプトに見られるように、もう一度歴史的な時間軸の中で、目前の問題を見つめなおす作業は不可欠であろう。番組では、第二次世界大戦後の冷戦の影響が現れた例として、東西両ベルリンの二つの大学について言及し、伝統を誇るフンボルト大学は、ソビエト占領下の東ベルリンに組み込まれたため、西側陣営はそれに対抗する形で西側に脱出した教授達によって「ベルリン自由大学（Freie Universität Berlin：通称FU）」が創設されるいきさつも紹介されている。

236. 「筑紫哲也の世紀末紀行・華麗なるウィーン」[1998年5月3日・BSN <TBS系列>・90分]

ジャーナリストの筑紫哲也が、19世紀末の意味をたずねてウィーンを旅し、来るべき21世紀を考える歴史紀行ドキュメンタリー。旅の道連れは、音楽担当のピアニストの西村由紀江。ナレーションは俳優の森本レオ。最初に取り上げるのは、1898年に暗殺されたヨーロッパ最長の王朝

ハプスブルクグルク帝国の後妃エリザベート。その悲劇の生涯と生き方を、帝国崩壊の歴史と重ね合わせながら紹介し、時代背景を浮かび上がらせる。その上で、自由な表現を求めて権威と闘った「退廃と官能の画家」クリムト、音楽家マーラーとその妻アルマ、建築家のワーグナーらにスポットを当てる。終章では彼らが切り開いた20世紀がそのままには発展しなかったわけを探るため、「人間と環境の共存」を主張し、ユニークな建物を生み出している建築家フンデルトワッサー氏と筑紫が対論する。歴史の変わり目で、もだえ苦しみながら新時代を開拓した先人たちの姿は、現代を生きる我々に多くの示唆を与える。単なる回顧にとどまらない興味深いレポートだが、その分羅列的な構成と表面的な掘り下げ方に物足りなさも覚えた。(『朝日新聞』1998年5月3日<試写室>より引用)

#### ICE (Intercity Zug) ドイツ都市間特急電車脱線事故

⇒関連新聞資料：「読売新聞」1998年6月4日。特急脱線、60人死亡  
独北部

「ベルリン3日＝貞広貴志」3日午前11時(日本時間同日午後6時)ごろ、ドイツ北部ニーダーザクセン州エシェデでミュンヘン発ハンブルク行きの特急列車(ICE)が、線路上に落ちてきた乗用車に衝突して少なくとも60人の乗客が死亡、200人を超す負傷者がでた。死傷者数は70人に上るとの情報もある。現地からの報告によると、線路と交差する跨線橋を走行していた乗用車がガードレールを突き破って線路上に落下、直後に通りかかった列車がこの車に激突した。列車は時速約200キロで、先頭車両を跳ね飛ばした後、脱線して跨線橋に激突し、後続車両は約200メートルはなれた地点まで吹き飛ばされた。衝突のショックで跨線橋も崩壊し、電車の上に落下したという。電車には数百人が乗っており、つぶれた客車内に閉じ込められた乗客もいる模様。同日午後現在、日本人乗客は確認されていない。

237. 「検証・ドイツ高速列車事故」〔1998年6月11日【クローズアップ現代】・NHK・30分〕キャスター：国谷弘子、ゲスト：小出五郎（解説委員）。

脱線事故の原因を探る検証番組。事故から一週間後、現在の時点では、二重構造の外輪の破損が原因と考えられている。警報装置は作動しなかったとともに、当初つくられていた「危機管理システム」はまったく無力だった。車輪の破損を検地するシステムが組み込まれていなかったからである。車輪が破損すれば直ちに脱線するものと予測されていたが、実際は破損後なお6キロメートルも走り続けた。つまり通常のブレーキで停止する余裕があった。事故から一週間後の事典で原因はまだ特定されていない。惜まれるのは、車輪破損の時点で何らかの対策が取られなかった点である。番組の後半では、高速交通システムで起こりうる事故に備える安全対策について日本での取り組みが紹介される。

238. 「揺らぐ高速鉄道の安全」〔1998年6月15日【あすを読む】・藤吉洋一郎解説委員・NHK・10分〕

日本の新幹線開発と実用化に端を発した鉄道的高速化は、ヨーロッパに波及し、現在は中国でも高速鉄道化のプロジェクトが推進されている。鉄道による旅客輸送は、高速化により車や飛行機からある程度のお客を取り戻してきたが、6月4日のドイツICEの事故は、高速鉄道の安全性を大きく揺るがしてしまった。果たして日本ではどうなのか。JRによれば新幹線の車輪は車軸と一帯構造でドイツと同じような事故は起こり得ないことを強調している。とはいえドイツの今回の事故から学び取るべきことはあるはずである。今回の事故を取上げるマスメディアもただ単に科学解説記事のように、事故原因のテクノロジーの側面だけに力点を置いて、合理的な説明で充足することなく、現代の科学技術が本質的に抱えている危険性を見落としてほしくないものである。

⇒関連文献資料：「朝日新聞」1998年6月5日。

「欧州の鉄道 ひろがる「超高速網」 ヨーロッパの高速鉄道のさきが

けはフランス国鉄だ。1960年代後半にTGV計画を打ち出し、1981年には日本の新幹線の速度記録を抜いた。その後も車体の軽量化など改良を進め、1990年5月に時速515.3キロの世界記録を樹立。日本の山梨リア実験線が531キロを記録するまで「世界最速の鉄道」を誇ってきた。以後、各国が競うように高速鉄道の建設を進めていく。1991年にはドイツのICEが開業。スペインもセビリア万博に合わせて1992年、AVEを開業した。1994年には、英仏間を結ぶユーロトンネルの開通でロンドンとパリ、ブリュッセルなどを結ぶ「ユーロスター」が営業運転を始めた。2010年までにフランスのTGVをスペインのバルセロナ、マドリードまで延伸する構想も検討されている。超高速鉄道の「網」はとどまるどころを知らず広がる勢いだ。「ヨーロッパで高速鉄道を導入しやすい環境がある」と話すのは、「トーマスクック・ヨーロッパ時刻表」の翻訳に10年以上携わり、現地の事情に詳しい東京女子大学の小池滋教授(英文学)。ヨーロッパでは在来線の軌道幅は日本の新幹線と同じ広軌で、しかも直線が多く踏切が少ないため、そのまま高速鉄道を走らせることができる。冬の天候が悪く飛行機が欠航しやすいことも、鉄道の大きな利点だ。小池教授は「ヨーロッパでは駅などの施設の一部だけ作ればいから、建設コストは日本よりはるかに安くすむ」と、スピード競争が進みやすい背景を指摘する。

239・240. 「ユーロ・世界を変えるマネー (1)通貨統合の道のり～ドロール前 EC 委員長の証言～ (2)ヨーロッパ経済に何が起こるのか」〔1998年7月1・2日・『ETV 特集』・45分×2〕番組司会：町田俊男 ゲスト：柏倉康夫(京都大・元NHK解説委員)

(1) 通貨統合の道のり～ドロール前 EC 委員長の証言～

ヨーロッパの新しい通貨ユーロ。ユーロに参加する11カ国は、現在国ごとに独自の通貨を使っている。6月1日ドイツのフランクフルトで、ヨーロッパ中央銀行(欧州中央銀行)が発足、ここを中心に1999年1月1日からヨーロッパの新しい単一通貨ユーロに切り替えていく。異なる

国の通貨を平和的に一つにするのは歴史上初めてのことである。この通貨統合の基本計画を作った一人がジャック・ドロール前 EC 委員長である。第一回目はドロール氏の証言を元に、ヨーロッパ通貨統合の歴史をたどる。ヨーロッパ統合の二つの目的は、第一次世界大戦・第二次世界大戦という人類史上でもっとも悲惨な戦争を体験したヨーロッパの国々が、二度と戦争を起こすまいという強い願望で国境という垣根を取り払おうとするという平和戦略と、戦後、非常に強くなったアメリカの経済力そして日本の経済力に対抗できる統一的な経済市場を確保するという経済戦略の二つの目的に根ざしている。番組では通貨統合の第一歩となる「欧州中央銀行」発足にいたるまでの各国のさまざまな確執が語られる。

(2) ヨーロッパ経済に何が起こるのか

ゲスト：柏倉康夫。ピーター・タスカ (エコノミスト)。5月11日には「ユーロ硬貨製造開始式典」がフランスで行われた。1999年1月1日からユーロは「帳簿上の通貨」として使用開始となる。そして2002年から各国と紙幣と硬貨と交換され、日常生活での使用が始まる。ユーロ導入によってヨーロッパ経済に何がおきるのか、そして世界経済にどのような影響を与えるのか。ここで委員会が掲げた通貨統合の4つのメリットは、(1)貿易・投資の活発化 (2)取引コストの低下 (3)利率の低下 (4)安定した通貨・金融政策 (アメリカ・ドルを基軸にした金融政策に振り回されない独自の政策を可能にする) である。番組では、ユーロ参加決定後の各国の経済的・政治的取り組みを具体的に紹介していく。マーストリヒト条約 (1991年) ではユーロに参加する国は、国内の財政赤字を国民総生産 GDP の3パーセント以内に削減することなどが義務付けられた。そして欧州中央銀行の前身「欧州通貨機構」が、各国がこの参加義務を果たしたかどうかを判定した。3月には、各国が参加基準を満たしたか否かの結果報告書が出された。結果は11カ国とも合格であった。会場に集まったメディアはただちに自国に報道した。ドイツにおける財政



赤字削減の施策は、社会保障制度の見直し（サービスの低下）を、フランスと同様に余儀なくされた。財政赤字の削減という条件は、今後新たに参加する国々にも大きな課題となる。

241. 「ドイツ～東洋の黒ヒヨウと呼ばれて～」〔1998年7月16日・『世界・わが心の旅』・BS2・45分〕

中世の面影の残るドイツ・ケルン。ここは、ドイツのプロサッカーリーグ・ブンデスリーガを代表する名門チーム「1.FCケルン」の本拠地である。町外れの公園にはしゃれた「1.FCケルン」のクラブハウスが立っている。そこにチームの黄金時代を築いた栄光のイレブンの勇姿が飾られている。50年に及ぶ「1.FCケルン」の歴史で最強と言われた男たち。その中に一人の日本人・奥寺康彦がいる。黄金の左足が繰り出す鋭いシュートによって「東洋の黒ヒヨウ」と呼ばれ、本場ドイツのサッカー界で9年間にわたって活躍した日本人初のプロサッカー選手でもある。その奥寺は再びケルンに帰ってきた。現在サッカー解説者として活躍する46歳の彼は20年前サッカー選手として活躍した9年間を一度振り返ってみようと考えていた。奥寺は、かつて日本サッカー世界の名門・古河電工に所属、黄金の左足で知られるエース・ストライカーだった。1977年の夏、日本代表の一員としてドイツで合宿。このとき彼の左足に注目したのが、「1.FCケルン」の監督ヴァイスヴァイラーだった。ヘネス・ヴァイスヴァイラー（1919-1983）は、新人の発掘と優れたチーム作りによって世界的に知られた名監督であった。監督の熱心な勧めでドイツ行きを決意、この年の10月日本人初のプロサッカー選手となり、ブンデス・リーグで闘うことになった。25歳で単身ドイツに渡り、言葉にも不自由しながらの新生活が始まった。当時、ドイツ・サッカー世界でただ一人のアジア人であった。さまざまなプレッシャーの中で落ち込んでい奥寺の胸のうちを読み取り、心底から激励してくれたのが他ならぬヴァイスヴァイラー監督だった。監督は結果の出せない奥寺を毎回試合に出し続けた。自分が見込んだ男は必ず一人前にして見せる

という執念にも似た起用だった。シーズン終了間際、そんな期待に応える時が来た。対シュトゥットガルト戦で、左足からのシュートが決勝点となって、ケルンの優勝を決定づけた。そして最終戦[1978年4月29日]、対ザンクト・パウリ（ハンブルク）戦で鮮やかなダイビング・シュートを放ってチームの優勝に花を添えた。さらにこの年はドイツ・カップでも優勝、二冠を制した。優勝したイレブンには、晴れがましくケルン市庁舎のバルコニーに立った。この活躍を契機にドイツのサッカーファンは奥寺を「東洋の黒ヒョウ」と親しみを込めて呼ぶようになった。監督の目に狂いはなかった。奥寺の活躍はヨーロッパ中のテレビで放映され、ヨーロッパで一番有名な日本人となった。ケルンに再び来て奥寺はまずケルン郊外の墓地を訪れる。ヴァイスヴァイラー監督の墓碑銘には「Ein Leben dem Fussball (サッカーに奉げた人生)」と刻まれている。

242. 「ドイツ・バイエルン～花がこころを結ぶ街～」[1998年8月13日・  
『地球の暮らし方』・50分]

京都在住の名古（なこ）光夫さん〔28歳〕は、旅行会社の添乗員をしていた。しかし、どうしても花屋を開きたいと決心、今年3月会社を辞めて知り合いの花屋で店員として働き出した。奥さんの比加里さん〔29歳〕は、観光や旅行の記事を扱う新聞社に勤めている。現在夫婦でそろってドイツで学んだ経験を持つフロリストのもとで勉強している。二人は本格的に花屋の勉強をするために、9ヶ月になる一人娘の梨世（りせ）ちゃんをつれて二週間の旅に出ることになった。目的地は、ドイツ・バイエルン州。南ドイツは気候にも恵まれ花の栽培も盛んに行われている。二人が向かった先は、ミュンヘンから電車で40分のところにある人口16,000人の町モースブルク。ここには花屋が5軒あり、いずれも大規模な花農園を所有している。将来は花屋で生計を立てようという若者が、高い栽培技術や花屋の経営方法を学ぼうとこの町にやってくる。町のいたるところに花が飾られている。町の人にとって花は生活の大切な潤いとなっている。今回、名古さん夫婦を受け入れてくれることになったの

は、町で一番大きい花屋のヴァイスハウプトさんである。ここでは今までも多くの若者を受け入れてきた。ドイツでは、花の世界にも伝統的なマイスター〔徒弟〕制度が受け継がれ、花屋の資格を取るには、3年間の実務経験が必要である。名古屋さん夫婦は、店を開いて34年のオーナーのフーベルト・ヴァイスハウプトさん（66歳）に親しみを込めてドイツ語で南ドイツの挨拶言葉「グリュス・ゴット！」と話しかけた。こうして二人のドイツでの花屋修行が始まった。

243. 「ゲッターの絵画教室～フリードル先生と子供たち～」〔1998年8月14日・ETV・45分、製作：アーゴ・フィルムズ（イスラエル）／チェコ・テレビ（チェコ）1997年〕

絶望の中で絵を描いた子供たちがいた。絵には「希望」があった。美しい野原に、チョウチョが飛んでいる。遊園地で遊んでいる絵もあった。家族でお出かけしている絵や食事をしている絵も。約15万人が収容された「テレジン収容所」には10歳から15歳までの子供たち1万5千人がいた。だれもが大好きな家族と引き離され、飢えと寒さに震え、過酷な労働、容赦ない拷問に苦しみ、死んでいった。終戦まで生き残った子供はわずか百人だったといわれる。地獄の中、絵を教えることで子供たちに「希望」を灯（とも）し続けたのがフリードル・デッカー先生である。彼女は、1898年オーストリアに生まれたユダヤ人である。有名なドイツの総合芸術学校「バウハウス」で才能を発揮したが、ナチスのユダヤ人迫害を逃れ、チェコスロバキア（当時）へ移り住む。彼女は身の危険も顧みず、自分の部屋にユダヤ人の子供を招き絵画教室をはじめた。彼女の身を案じた友人が脱出用のパスポートを用意したにもかかわらず、彼女は「あの子供たちを置いていけない」と断り、1943年12月、44歳のときテレジン収容所に送られる。ここでも厳しい監視の目を逃れて絵を教えた。彼女は絵を描く前に、歌ったり、体操をして、子供たちの身体と心を苦しみから解き放った。そして「目をつぶってごらん。楽しかったことを思い出してごらん」を話かける。「今日は、つらかったでしょう。

だけど明日になれば、きっと、もっと良い日になるわよ。希望を持って生きましょう」子供たちは、楽しかった「あの日」を思い出しながら絵を描いた。絵の具がなければ、糸くずで描き、紙がなければ、ゴミくずを拾って描いた。描くことが、生きることだった。そして、1944年10月、フリードル先生は、30人の子供たちと友にアウシュヴィッツへ送られ、帰らぬ人となった。

⇒関連映像資料：253. 「国際赤十字の光と影 (2)ホロコーストの試練」  
[1998年11月8日・「BBC セレクション」・BS1・50分]

244. 「祖国へ～ホロコースト後のユダヤ人～」[1998年8月29日・BS1・90分・制作：モライア・フィルムズ/米・1997年 解説：寺内正義 NHK 解説委員]

「エジプト王ファラオがイスラエルの民を去らせた時、神は彼らをペリシテ街道にではなく荒れ野の道に遠回りさせられた」(旧約聖書 出エジプト記 13章)

1948年に中東の地パレスチナユダヤ人国家が建設された。ナチス・ドイツがヨーロッパを席卷してから、大虐殺の運命に翻弄されていたユダヤ人にとって、大きな喜びの瞬間であった。しかし、それはパレスチナの地に以前から住んでいたアラブ人・パレスチナ人に対する憎しみと敵意を生んだ歴史的な瞬間でもあった。それ以来中東は怨念と対立の坩堝(るつぼ)となり現在に至っている。この作品は、第二次世界大戦からイスラエル建国にいたる歴史を、死の淵から立ち上がったホロコーストの生存者の思いを中心にして、ユダヤ人の視点から描いたドキュメンタリーである。作品の中の語りは、1945～1948年のイスラエル建国の激動期を生きた人たちの回想録・手紙・日記・口述記録に基づいている。なおこの作品は、第70回(1998)米・アカデミー賞ドキュメンタリー賞を受賞した。

ユダヤ人は紀元前1500年ころパレスチナに移住し王国を築いた。やがてローマ帝国の支配下に入り、2世紀にはこの地から追放される。しか

し、ユダヤ人は旧約聖書に記された「約束の地」に帰ることを夢続けていた。7世紀にはアラブ人がパレスチナを征服し、一度はヨーロッパから来た十字軍に領土を制圧された後もここに住み続けた。そこへ20世紀になるとナチスの迫害を逃れた人たちが入国してくる。当時パレスチナを委任統治していたイギリスは、敵対するアラブ人とユダヤ人をなだめる。それは中東における大英帝国の権益を守るためであった。はじめイギリスはパレスチナでユダヤ人国家建設を支援すると約束していた。しかし、アラブ人の圧力で政策を変更する。1945年6月にはパレスチナへのユダヤ人の移住者を毎月1500人まで制限することになった。このころヨーロッパは第二次世界大戦で廃墟と化し、ドイツ国内でもおよそ1100万人の人たちが難民となってさまよっていた。そのうちおよそ10万人のユダヤ人に変わるべき国はヨーロッパにはもはや存在しなかった。

⇒245. 「栄光への脱出」 (“Exodus”, 1960年・米) 監督：オットー・プレミンジャー、出演：ポール・ニューマン、エヴァ・マリー・セイント。イスラエル建国期の物語。1947年のキプロス島にはイスラエルに帰国しようとするユダヤ人たちが収容されていた。夫の消息を尋ねてキプロスを訪れた米国女性キティは、地下運動の指導者アリと心を通じ「エクソダス（脱出）号」と名づけられた老朽船で母国へ向かおうとするが、そこには上陸を阻止しようとするイギリス軍が待ち受けていた。（アカデミー音楽賞受賞、212分）

⇒246. 「巨大なる戦場」 (“Cast a giant shadow” 1966年・米) 監督・脚本：メルヴィル・シェイプルソン。出演：カーク・ダグラス。実在の人物ミッキー・マーカスの伝記を素材にした戦争秘話。イギリス軍の撤退を機に、ユダヤ人を追い出そうとするアラブ諸国が圧力をかけているパレスチナ。ニューヨークに住む退役大佐マーカスは、民族独立のために戦うユダヤ人を応援するためにパレスチナに向かい、独立運動の組織作りに取りかかることになる。（142分）

⇒247. 「栄光の丘」 (“Judith”, 1965年・米＝英＝イスラエル) 監督：ダ

ニエル・マン。出演：ソフィア・ローレン。1947年のパレスチナ分割による動乱のイスラエルを舞台にしたラヴ・ストーリー。出世のために幼い息子をナチスに密告し、自分を将校慰安所に送り込んだ夫グスタフに復讐するため、不法入国の移民としてパレスチナにやってきた一人の女性。そこには、同じようにグスタフを探す、イスラエル建国に情熱を傾ける男アーロンがいた。(109分)

関連映像資料として紹介された上記3本の映画、もちろんそれぞれに大変優れた映像作品となっているが、その制作と公開の時期とが、イスラエルにおける「アイヒマン裁判」が話題となった時期と前後しているという点は指摘しておきたい。

248. 「金髪のヨハネス～ナチにさらわれた子どもたち」〔1998年9月5日・BS1・80分、1997年4月6日の再放送〕

「優秀人種増殖」をはかったナチスの人種差別政策の傷跡を追う番組。「生命の泉 (Lebensborn)」というのがこの政策で作られた秘密組織である。ナチスはこの種のネーミングに大変優れた能力を発揮したともいえる。もちろんこうしたネーミングは、かつて日本において「らい予防法 (1996年に廃止)」という法律の下に強制隔離された人々の国立の療養所 (じつは強制収容所) に「愛生園・楽泉園」などと名づけたことと軌を一にする。ナチスが優秀と信じたアーリア人女性とナチス親衛隊隊員との「婚外交渉」により生まれた子供を育て、さらに占領国の子供を連行し、ドイツ人化教育を施した。ポーランドから連れ去られた20万人のうち戻れたのは4万人だけだという。番組では、ナチスの組織した育児施設で育てられたことを知ったヨハネス・ドリガーさん (54歳) の「自分探し」を軸にする。ノルウェー人の母は、彼が探し当てる前年になくなり、ドイツ兵だった父ラトビアで戦死していた。施設で育った人たち特有の性格を研究者から指摘される場面も。アウシュヴィッツと表裏をなす人種政策の犠牲に対して声高には糾弾していない。しかし、各地を歩き回るヨハネスさんの姿に当惑と悲しみ、そして戦争への強い非難を

感じる。ナチスは人種差別政策としてユダヤ人絶滅政策のほか、優秀と考えるアーリア人種の「増殖」を画策した。ドイツ軍人と占領地のアーリア系女性との婚外交渉を推奨し、金髪で青い目の子供をドイツに連行してエリートに育て上げようという計画である。ヨハネスさんは、4年前ドイツ軍人とノルウェー女性との間にできた子供であることを知って、深い疑問にさいなまれた。長い間苦しんできた得体の知れない心の空洞の原因はいったい何なのか。長女の自殺、二女の家出という家族の不幸とも関係があるのか。母や父はどのように生き、どのように死んでいったのか。そもそも自分はいったい何者なのか。ヨハネスさんは心の空白をどうにかして生めようとする。近年、不妊治療の技術が進歩し、夫婦から子供が生まれるという従来の常識が崩壊し始めている。成長した子供たちがヨハネスさんのように自らの出生の事実を苦しむという望まない苦しみが続けられまいだろうか、大きな不安を抱かざるを得ない。

⇒関連映像資料：「新しい生命観の時代 (3)生命選択の時代に直面する」〔1998年9月30日・ETV・講師：森岡正博〕

⇒関連映像資料：148. 「ナチズムと医学者の責任～ドイツ遺伝学者ベンノ・ミュラーヒルとの対話」〔1995年11月16日・ETV/45分〕「法政理論」第34巻第1・2号(2001) p.42-43.

249. 「追われる虚像～ドイツ・コール政権の岐路～」〔1998年9月20日・BS1、製作：NHK・60分〕

ドイツ連邦共和国首相ヘルムート・コール68歳。1982年の就任以来16年間首相の座に就いてきた。1990年の統一式典において彼は次のように国民に呼びかけた。「どんなに道が険しくても一緒にドイツの未来を築いていきましょう」。ドイツ統一を成し遂げたコール首相は、東西冷戦を知る最後の大物政治家であり、その輝かしい業績から「ミスター・ヨーロッパ」とも言われている。しかし今コール首相の威光に陰りが見え始めている。東西ドイツ統一に必要とされた過大なコスト、そして400万人に及ぶ失業問題、ドイツ国民の間には、コール首相への不満が鬱積

(うっせき) している。ゲンシャー前外相は「16年も続けば有権者が迷うのも当然です」。シュミット前首相は「コール氏は東西ドイツの経済的な統合に失敗しました」とも述べている。劣勢を強いられたコール首相、誰もが認める業績と、世界に通用するドイツの巨像が今時代の波に押し流されようとしている。ベルリンの壁が取り壊され、東西ドイツが統一されてから8年、民族の悲願を果たした立役者は、当時もそして今もそこにあるヘルムート・コールその人である。合わせて4期16年という政権担当の長さ、戦後のアデナウアー首相の13年を抜くものである。また、冷戦時代を一緒に生きてきた西側の指導者、例えばアメリカのレーガン大統領の8年、イギリスのサッチャー首相の11年、フランスのミッテラン大統領の14年を越える。ちなみにこの16年の間に、日本では11人の総理大臣が交代した。しかし今ドイツの国民は、国の繁栄をもたらし、そして祖国の統一を成し遂げた英雄を永遠に歴史の彼方へ追いやろうするのか。9月26日に投票が行われる連邦議会議員総選挙を前に、各種の世論調査機関は与党の敗退と政権交代の可能性を伝え始めた。16年の長期政権に国民がただ飽きてしまっただけなのか、イギリス、フランスを襲った左派による政権交代の波がドイツにも波及するのか、あるいはそれ以外のドイツ固有の事情があるのだろうか。いずれにせよ、現在ドイツに変化の風が吹き始めていることは確かである。番組では、平野次郎が現地取材し、そうした変化の動きを具体的にルポルタージュする。

250. 「1998・ドイツ総選挙～コール続投か、政権交代か～」〔1998年9月21日・BS1・【ワールドニュース BS22】・30分〕キャスター：藤澤秀俊／住友真紀、ゲスト：仲居斌（成蹊大学）。

ドイツの総選挙が投票まであと一週間と迫った。4期16年というヨーロッパでも最長の政権維持を誇る「キリスト教民主同盟」中心のコール政権が続くのか、それともシュレーダー氏を首相候補に押す野党「社会民主党」が政権を奪うのか、ドイツは政治の大きな岐路に差し掛かって



いる。選挙は、日本の衆議院に当たる連邦議会の議員を選ぶもので、この選挙で過半数を占めるか、もしくは連立政権を組んだ党が政権を担うことになる。現在、一つの党で過半数を占める可能性はなく、選挙でどこが第一党になるかが鍵を握ることになるが、最新の世論調査では、コール首相率いるキリスト教民主同盟を大きくリードしていたシュレーダー候補が率いる野党・社会民主党はその差を縮められていて、結果は予断を許さない状況である。与党候補のヘルムート・コール〔68歳〕氏は、52歳の若さでドイツ史上最年少の首相になり、いわばエリート政治家として「西ドイツ」の発展を支えてきた。1990年には国民の悲願だった東西ドイツ統一を実現、就任以来過去4回の選挙を勝ち抜き16年間にわたって政権を維持してきた。冷戦時代を知る各国の首脳が相次いで姿を消す中でヨーロッパを代表する存在ともなってきた。

しかし、ここ数年は旧東ドイツ地域の経済再建の遅れや、深刻な不況と失業という課題を抱え、支持率が低迷し、政治の刷新か現状維持か国民の裁定を受けることになった。一方、ゲアハルト・シュレーダー（54歳）氏は野党・社会民主党の首相候補として16年ぶりの政権奪還に挑む。母親一人の手で育てられ、貧しさの中で苦学して弁護士になったという、いわゆる立志伝中の人である。85万人の黨員を持つドイツ最大の社会民主党に19歳で参加し、連邦議会議員を経て1990年にニーダーザクセン州の首相に初当選した。そして1998年3月に行われた州議会選挙で高い得票率で3期目の当選を果たしたために、党首ラ・フォンテーヌ氏を抑えて首相候補に抜擢された。野心家で強い意志を持っており、現在国民の間で最も人気のある政治家の一人である。ドイツでは、小選挙区制（補者名の記入）と比例代表制（政党名の記入）が併用されている。連邦議会の定数は656で、原則として半数の328が小選挙区から、残りが比例代表で選ばれる。しかし、小選挙区で当選した各政党の獲得議席数によっては定数が増える「超過議席」が認められる制度になっている。4年前の総選挙では、超過議席を加えて672議席であった。現在の各党の議

席数は、コール首相率いる与党のCDU（キリスト教民主同盟）と姉妹政党のCSU（キリスト教社会同盟：地盤は南ドイツのバイエルン州）が295議席、それに連立を組んでいるFDP（自由民主党）が47議席で、与党が過半数をわずかに5議席上回っている。一方シュレーダー氏を擁立している、労働組合を母体とするSPD（社会民主党）が251議席、「緑の党」が48議席、そしてPDS（民主社会主義党）が30議席となっている。このように4年前の選挙でも過半数を獲得した政党はなかった。今回の選挙でも単独で過半数を獲得する政党はないと見られ、連立は避けられないものと予測されている。注目される要素として、EUヨーロッパ諸国の中で、12カ国が社会民主党が単独あるいは連立で政権を持っているという外部状況がドイツ国民の選択に影響を与えるかどうかということである。これは、日本では社会民主党の退潮傾向が目立つ中で注目すべき点である。もう一点は、やはりボンからベルリンへの統一ドイツの首都移転、そして新世紀の幕開けという歴史的転換期に、どのような政権が晴れ舞台に立てるかということである。政策課題は、400万人を超す失業者問題（10%を越える失業率）、雇用の創出、通貨統合を控えた企業の国際競争力、税制改革、高齢者福祉と年金改革と山積している。こうした中でCDUとSPDに大きな政策の違いはない。むしろ今回の選挙戦は政策論争よりも、コール首相を5たび首相として選ぶか、それとも世紀の変わり目に新しい指導者に将来を委ねるか、ドイツ国民による信任投票の様相が次第に濃くなってきている。

251. 「ドイツ新政権～難題抱えた船出～」〔1998年10月27日・BS1・「ワールドニュースBS22」・30分〕キャスター：藤澤秀俊／住友真紀。

ドイツで新政権が新しい船出した。16年間におよぶコール政権に終止符が打たれ、新たにシュレーダー政権が誕生した。新しい首相の指名選挙は、ドイツ連邦議会で行われ、先の総選挙で第一党に躍進したドイツ社会民主党のシュレーダー氏が、半数を16票上回る351票を獲得して、ドイツの新しい首相に正式に選ばれた。ドイツでは初めての選挙による

野党の政権交代が実現した。新内閣の顔ぶれの内訳は、社会民主党から首相を含めて12人、緑の党から3人、そして民間人1一人となっている。社会民主党の党首ラ・フォンテーヌ氏は蔵相という重要なポストについたことで、シュレーダー氏との主導権争いもうわさされている。緑の党のフィッシャー氏は外相となった。社会民主党と緑の党との『連立協定』は両党の幹部の間で調印され、両党の党大会でそれぞれ承認されている。政策協定の中身について、「経済政策」ではコール政権が決定していた「年金給付金の引き下げ・社会保障費削減」を撤回し、労働者に手厚い政策を打ち出している。税制面では、所得税を6～7パーセント引き下げる政策を約束している。企業に対しては厳しく、環境税を導入し社会保障費の財源に充てるとしている。外交・防衛面ではコール政権の継承をうたっている。NATO 拡大については支持し、ドイツ連邦軍の平和維持活動は国内法と国際法に基づくことを明記。原発・環境政策では、原発は将来的に廃止する方向を明確にした。しかし、緑の党が要求していた原発廃止の時期の明記は行われなかった。そして環境対策の大きな目玉であるガソリン税の大幅な引き上げは見送られた。

なお今回の総選挙で、SPD はドイツでは本格的ともいえるメディアを利用した選挙戦を展開した。演出したのはアメリカやイギリスのメディア選挙のプロたちである。コール首相は「停滞」、シュレーダー首相は「前進」というイメージをマスメディアを使って繰り返し放送した。さらに今回はインターネットが重要な選挙戦の武器となった点が注目される。今回の総選挙の結果についてボン大学のカイザー教授は次のように述べている。「ラ・フォンテーヌ氏は党の多数派である左派に強い力を持っていますが、その左派も政権内にあるシュレーダー氏には、ラ・フォンテーヌ氏の力が必要なのです。ラ・フォンテーヌ氏自身も新政権を成功させたいはずで、二人はお互いを必要としているのです。ドイツは来年1月 EU の議長国となります。EU は多くの問題を抱えています。財政問題や機構改革、また EU 拡大といった問題です。また多国間

協調軍事行動へのドイツ軍の派遣も今後問題となるでしょう。」

252. 「国際赤十字の光と影 (1)戦場における中立」 [1998年11月1日・  
「BBC セレクション」・BS1・制作：BBC/英 1997年・50分]

「国際赤十字」の役割とその限界を正面からとらえた大変骨太な番組である。現在、世界の各地で地域紛争が耐えない状態の中で、そして現在の役割とその使命の重大さ、そして直面している問題点を性格に認識するためにも、国際赤十字の140年の歴史を概観することは意味のあることである。そして、その歴史には輝かしい人道主義の成果と同時に、第二次世界大戦時のホロコーストとのかかわり方などに見られる汚点を知ることも同様に必要である。番組のタイトルバックに出てくるいくつかの言葉が、赤十字を読み解くキーワードになっている。(Neutrality, Impartiality, Universality, Unity, Voluntary Service, Independence, Humanity) 進行役のジョン・シンプソンは、長年BBC 特派員として世界各地の紛争を取材し、数々の賞を受賞、現在はBBCの世界情勢担当部長である。第一回目の「戦場における中立」では、赤十字の歴史を概観し、設立当初から内在していた問題点を掘り下げて検証する。世界のどこかで戦争が始まると、国際赤十字はジャーナリストと同じくらい迅速に現地に駆けつける。そして状況が過酷になり、ジャーナリストが撤退した後でさえ、彼らは現地にとどまり続ける。シンプソン氏によれば、紛争地域で献身的な活動を続ける赤十字の体質はきわめて閉鎖的で、実態はよく把握されていないと指摘、今回番組のために赤十字は半年間取材を許可し、初めて活動の実態を検証することが可能となったもの。第一回目：「戦場における中立」では、1859年イタリア・オーストリア国境に始まる赤十字の歴史を丹念に追っていく。スイスの事業家アンリ・デュナン (Henri Dunant) は戦場の悲惨な有様を目にし、国籍に関係なく負傷兵を手当てするシステムの必要性を痛感した。こうして赤十字の母体が誕生し、「ジュネーブ国際条約」が成立するが、デュナンの目指したのは、戦闘における犠牲者や負傷者を助けることであって、

決して戦争そのものに反対したのではない。彼は戦争は避けられないものと現実主義的な認識を持っていた。さらに赤十字は、戦場の悲惨な現実を世界に知らせることにより、特定の国家や政権を告発することはない。あくまでも中立的立場を取ることによって、戦場における活動が保障されているわけである。メディアのような報道機能は持たない、この赤十字の「沈黙の原則」は、いまだに守られ続けている。

253. 「国際赤十字の光と影 (2)ホロコーストの試練」〔1998年11月8日・  
「BBC セレクション」・BS1・50分〕

ジュネーブには「赤十字国際博物館」があり、さまざまな展示物を通して赤十字が誇る数々の輝かしい歴史が紹介されている。しかしその歴史の影には暗い事実も潜んでいる。それが公に知られるようになったのはごく最近のことである。第二次世界大戦において、赤十字はその輝かしい歴史に一つの汚点を残した。記録によれば、赤十字はナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺の事実を知りながらそれを公表しなかった。言い換えれば、彼らはホロコーストの真っ只中で苦しむ多くのユダヤ人を見殺しにしたことになる。収容所の生存者の中には赤十字をあからさまに軽蔑する人もいる。赤十字を運営してきたのはスイスの中でも裕福な人々で、彼らはヒトラーが政権を取ることをむしろ歓迎した。赤十字上層部の親ドイツ派は、ナチス・ドイツが共産主義の防波堤になることを期待していた。彼らは最も恐れたのは、ソ連の共産主義がヨーロッパに、なканずく中立国のスイスに侵入することであった。しかも当時の赤十字の予算の半分はスイス政府が拠出していたために、政治の影響を受けやすい体質であったことも否定できない。当時の事情を詳しく知る元赤十字国際委員会派遣員モーリス・ロッセル氏とジョン・シンプソン氏とのインタビューは、大変生々しい事実を多く含んでいる。強制収容所の存在と、そしてそこで何か行われているか、徐々に疑惑が深まる中、赤十字国際委員会はドイツ赤十字委員会とナチス親衛隊からある招待を受けた。それはチェコのテレージエン・シュタットにある強制収容所の

見学を受け入れるというものであった。しかしそれは赤十字の目を欺くために巧妙に演出されたものであった。そして、国際委員会はものの見事にだまされた。なお、本シリーズの3回目は「内線の渦中で」というテーマで、冷戦終結後の1990年代に世界各地で起きている地域紛争における赤十字の活動を検証する内容になっている。

⇒関連映像資料：「そして誰も助けに来なかった～アウシュビッツ生還者の証言～」〔2002年3月24日・BS1・50分〕

254. 「ドイツ・音楽の夢ふたたび」〔1998年12月1日・『世界わが心の旅』  
・旅する人：大賀典男〔ソニー会長〕・45分〕

西暦2000年統一ドイツの首都となるベルリンでは、21世紀の首都にふさわしい街づくりが急ピッチで進んでいる。とりわけベルリンの中心に位置し、かつては「ベルリンの壁」により分断されていた「ポツダム広場再開発」現場は、現在ヨーロッパ最大の工事現場と呼ばれ、その再開発プロジェクトの一翼を担っているのがSONYである。大賀典夫氏はクラシックの歌手から日本を代表する世界企業のトップになった異色の経営者としても知られている。戦争前のポツダム広場は、劇場やホテルが並ぶベルリンの文化の中心であった。しかし、戦争中の激しい空爆により徹底的に破壊され、戦後の復興は広場を分断したベルリンの壁によって阻まれた。そのポツダム広場をよみがえらせようと、ベルリン市は民間企業の資金とアイデアを借りて再開発を進めている。SONYは広場の一角にオフィスビル、劇場、住宅など8つのビルを建設している。大賀氏は、21世紀にはベルリンがヨーロッパの中で政治的、経済的そして地理的に中心になるだろうと予測している。戦後の激動の歴史を刻んできたベルリンは、大賀氏にとっても思い出の多い街である。大賀氏は、1955年、東京芸術大学を卒業の後、声楽の勉強のため初めてベルリンにやってきた。当時はまだ戦争の傷跡がありありと残っていた頃である。大賀氏は卒業以来初めて母校の「ベルリン芸術大学音楽学部」を訪ねる。こうして音楽の夢を追っていた若き日の自分を訪ねる旅が始まる。大賀

氏は戦後二人目の日本人学生であったが、現在では40人の日本人が学んでいる。日本での学生時代から大賀氏は当時まだ高価だったテープレコーダーに強い関心を抱いていた。これからの音楽家は自分の声を客観的に分析できる機器が必要だとも考えていた。テープレコーダーの技術1930年代からドイツで急速に発展した。大賀氏を、SONYの創立者森田、井深の両氏とを結びつけたのもほかならぬテープレコーダーであった。番組の後半、大賀氏はベルリンのテンペルホーフ空港から、自ら操縦する自家用ジェット機で一路ドイツ南部のバイエルン州へ飛ぶ。ノイシュヴァンシュタイン城を訪れた後、ザルツブルクのカラヤン邸へと向かう。そこで大賀氏とカラヤンの遺族との間で語られるカラヤンが亡くなった当時の様子は劇的である。ベルリンでの留学を終え、日本に帰国後SONYに入社するが、音楽とのつながりは切れることはなかった。やがて世界市場を席卷するSONYのオーディオ機器開発の過程で指揮者カラヤンとの付き合いが生まれたからであった。

→関連映像資料：「町工場世界へ翔ぶ～トランジスタラジオ・営業マンの闘い～」〔2000年12月12日・「プロジェクトX～挑戦者たち～」・NHK・45分〕

255. 「ドイツ・エコビジネスの最前線～環境先進国からの報告～」〔1998年11月15日・BS1・60分〕

1998年9月27日に行われたドイツ総選挙では、シュレーダー首相率いる社会民主党が、僅差で勝利。16年間続いたコール政権が終わり、新しい局面を迎えた。政権強化を図る社会民主党が連立を申し込んだ政党の「緑の党」は、環境保護を第一の政策に掲げる政党である。10月20日に連立協定調印式が行われ、緑の党フィッシャー氏が新外相兼副首相に就任した。ドイツにきわめて「環境色」の強い政権が誕生したことになる。こうした背景には、環境政策に対する関心が高いドイツ国民の眼がある。ドイツ環境省の調査によれば、環境にやさしい商品を選んで買うと答えた人が全体のおよそ8割を占めていることがわかった。消費者が商品選

びの目安にするのが「エコラベル」。1978年ドイツが世界に先駆けて導入した制度である。今ではエコラベルの有無で、消費者の評価に雲泥の差がつき、ベストセラー商品を生み出すには、エコラベル認定が必須の条件とまで言われている。ドイツではすでに多くの企業がエコロジーをビジネスチャンスとして取らえ、市場の獲得をめぐって熾烈な競争を繰り広げている。その動きは製造業から商業、流通、ファッション、そして金融と社会のあらゆる分野に及び、ドイツのエコロジー・マーケットは、西暦2000年には6兆円に達すると見込まれている。環境先進国として世界をリードするドイツの最新のレポートである。主な取材内容：旧東ドイツの・ブランデンブルク州ゼンフテンベルクとゼンフテンベルガー湖、かつて炭鉱で栄えた村のコステブラー村（ラウフマー露天掘りの褐炭の炭鉱跡：大規模な自然破壊の例）、チェルノブイリ原発事故の放射能汚染（1986）、反原発デモ、企業責任を具体的に明記した「ドイツ連邦環境保護法（Deutsches Umweltschutzrecht）」の成立。ミュンヘンのエコロジーによる格付け（エコレーティング）を行っているコンサルティング会社。エコ商品開発で起死回生を果たした電機メーカー。エコ企業への投資コンサルティング会社など。

256. 「音楽の都ザルツブルクの夏～世界最大の音楽祭～」〔1998年11月23日・BS2・50分〕

若手ピアニストの西村由紀江は、ザルツブルク音楽祭の取材のため現地入りした。ザルツブルクは、特急電車でウィーンから3時間半、ミュンヘンからは1時間半のところであり、世界遺産にも指定されている都市である。ここでは毎年7月半ばから8月末まで世界最大規模といわれる音楽祭が開催されている。音楽祭が産声を上げたのは1877年のことで、戦後はヘルベルト・フォン・カラヤン、カール・ベームなどが大きく貢献した。この音楽祭には今もなお世界有数の芸術家たちが結集し、20万人の人が訪れるという。西村は、モーツァルトゆかりのこの町で、人々がどのように音楽祭を楽しんでいるか、またどういった人たちが音楽祭を



作り上げているのかを中心としながら音楽祭の魅力について紹介していく、良質の「バック・ステージ・ストーリー」になっている。ドイツのバイエルン州と国境を接するザルツブルクは、その美しさから「北のローマ」とも呼ばれているが、古くから特産物の塩〔岩塩〕の取り引きで繁栄し、オーストリアでは最も早く5世紀にキリスト教の洗礼を受けた。ザルツブルク(Salzburg)は文字通り「塩の城塞」という意味である。大司教区となった9世紀以来およそ千年にわたってこの町には豊かな宗教文化が花開いた。西村は出演者だけでも3000人といわれる大規模なイベントの「組織委員会」取材する。彼女に対して、音楽祭芸術総監督のジェラルド・モルティエ氏はさまざまな苦労話を語る。毎年9月から始まるといわれる音楽業界の市場動向にも大きな影響を与える音楽祭として、毎回明確で斬新なテーマを設定していくのだという。7年前に総監督に就任した彼がもっとも苦心しているのは、カラヤンが30年近く君臨したこの音楽祭の伝統とそれを越える革新の調和であるという。

## 257. 「国境線の消えた国で～ドイツ～」[1998年11月23日・BS1・50分]

東西ドイツ統一の翌年1991年の夏、「子供たちの手紙コンクール」が行われた。主催はIGメタル本部(金属労働組合)。企画は、労働組合の機関紙「メタル」の編集部である。コンクールには、7歳から14歳までの子供たちから36通の手紙や絵が寄せられた。コンクールのテーマは、「とつぜん何もかも変わってしまった。ドイツで、世界で、そしてわたしの中でも」。手紙の多くは、旧東ドイツ地域の子供から寄せられたことからわかるように、変革の時期をもっとも敏感に感じていたのは、東独の子供たちであった。ある子供は次のように書いてきた。「地理の時間に西ドイツについて勉強しました。南極ぐらい遠いところにある国のことを聞かされている感じでした。なぜって、あの国境の向こうにはいけなかったからです」。手紙や絵には、子供たちの目で率直に捉えた戦後ドイツ最大の変革の時代が語られている。そして、かつての少年少女たちも、現在20歳前後に成長した。彼らにとって「国境」はずでに過

去のものになったのであろうか。番組では、コンクール当時入賞した5人のドイツ人若者のその後を追跡調査する形で取材が進められた。歴史を記述するときに、子供の視点が見落とされがちであるが、壁の崩壊・東西国家の統一というできごとが、その後の彼らの成長にどのように影響を与えたのか、そして20歳前後になり、ある若者は社会で、ある若者は大学生としてそうした過去をどのように語るか、その語り口が大変興味深い番組である。

258. 「ユーロの挑戦〜ルクセンブルク元首相ピエール・ヴェルナー〜」

〔1998年11月29日・「シリーズ・21世紀への証言」・BS1・60分〕インタビューの聞き手：高島肇久。

スペイン北部の町オビエド (Oviedo)、毎年10月の声を聞くとこの町に年に一度の大きな賑わいが訪れる。スペインのノーベル賞と呼ばれるアステリアズ賞の授賞式が行われるのである。今年もまた授賞式には世界各国から政治や文化などの分野で活躍する著名人がオビエド市内の授賞式会場に集まってくる。アステリアズ賞は世界の発展に貢献した人々を受賞するもので、これまで受賞した人の中には、旧ソ連のゴルバチョフ大統領、緒方貞子・国連難民高等弁務官などそうそうたるメンバーが名を連ねている。そして1998年の受賞者の中に一人の老政治家の姿があった。ピエール・ウェルナー (Pierre Werner) 氏 (84歳) である。元ルクセンブルク首相のウェルナー氏の受賞理由は、「EU (ヨーロッパ連合) の通貨統合への貢献」である。1999年1月1日ヨーロッパではEU加盟15カ国のうち12カ国で通貨がユーロに統一されることになっている。この国境を越える壮大な試みを導いてきたのがウェルナー氏である。彼は、1959年から、およそ20年にわたってルクセンブルクの首相を務めた。そして1970年にヨーロッパの通貨を一つに統合すべきだとする「ウェルナー・レポート」を発表して通貨統合への道筋を明確に示した。通貨を統合することによって、国家を超える共同体を新たに作り上げ、豊かで平和なヨーロッパを築き上げよう、ウェルナー氏がそうした通貨統合の

考えを提唱してからおよそ30年、その実現を前にウェルナー氏の先見の明と功績が今あらためて注目を集めている。ウェルナー氏は語る。「新しいヨーロッパのスタートです。私たちはヨーロッパを一つにしなければなりません。それは平和のための戦いなのです。」

番組前半では、第二次世界大戦後のヨーロッパ統合の動きが概観される。なんとといっても統合への最大の動機は、欧州が二度も体験した世界大戦である。悲惨な戦争を引き起こした理由は、主義主張や大義名分といったお定まりの理由は、表面上のもので、石炭や鉄鋼といった資源獲得が大きな動機となっていたことが根底にあった。すなわち世界大戦は、見方を変えれば他の多くの戦争と同様に「経済戦争」であったことにある。これが欧州統合という理念の根底にあることを見逃すわけには行かない。

259. 「ドイツ・古城に響く心の音」 [1998年12月13日・『情熱大陸』・BSN <TBS 系列>・30分]

旧東ドイツ、現在のザクセン州の商業都市ライプチヒは、壁の崩壊する前に市民のデモが大規模に行われた都市であるが、その市街地の中央にあるトーマス教会にJ・S・バッハは今も静かに眠っている。ここに一人の若い日本の音楽家がバッハ詣（もう）でに訪れた。古沢巖である。彼は、クラシックをベースに、ジャズや民族音楽を取り入れて、新しい独自の音楽世界を作り上げ、日本のトップ・バイオリニストとして注目されている一人である。だが、現在の彼は自分の奏でる音に納得がいかないで苦しんでいる。さまよい、もがき、とまどい、そして行き詰まることの繰り返し。どうしようもない古沢の迷い。そんな時彼はかつて20年前に自らの心を震わせた「あこがれの音」に救いを求めてドイツへと旅立った。ライプチヒ訪問の後、彼はドレスデンへと向かう。そこは、20年前彼を感動させたホルン奏者ペーター・ダム氏の住む町である。ダム氏と再会を果たした古沢は、早速予定されている彼と競演する演奏会の練習に立ち向かう。そして二人の芸術家の決して妥協を許さない厳し

い真剣勝負にも似た練習の中から「あこがれの音」を見出した古沢は、再び自分の音楽へのこだわりを発見していく。

260. 「ドイツ・水と緑の田園地帯～村にコウノトリがはばたく～」 [1998年12月14日・『生きもの地球紀行』・NHK・50分] ナレーション：柳生博。

ドイツ北部ブランデンブルク州、その平坦な土地をゆったりと流れているのがエルベ川 (die Elbe) である。この川に沿って広がる田園地帯では、人と背中合わせにたくさんの生き物が生息している。春に南からわたってくるコウノトリは畑や牧草地でえさをとり、民家の屋根で子育てをする。村人はそれを温かく見守り、さまざまな工夫で手助けをする。人々のやさしい心配りのおかげで、コウノトリをはじめたくさんの生物が命を支えている。番組では、ドイツの田園地帯でのコウノトリと人との密接なかかわり取材する。この川に沿う平原の20km四方の地域は8年前に自然保護区域「エルベ川水郷自然公園」に指定された。この公園の特徴は面積の半分以上が20あまりの集落や畑によって占められていることである。人々の暮らしを自然の形の一部として見つめようという新しい試みである。エルベ川の岸辺は湿地帯になっている。川は毎年2～3月にかけて雪解け水で増水し溢れる。そして水がひくと小さな池がたくさん出現し、たくさんの水鳥が集まってくる。水辺を離れると広大な牧草地が広がり、森が点在している。ベルリン市はこの広大なブランデンブルク州の真ん中に位置しており、車で30分も走ると、こうした田園風景を楽しむことができる。4月初めのまだ寒い朝にコウノトリは南からやってくる。コウノトリは冬をアフリカで過ごし、子育てをするためにやってくるのである。えさは昆虫や小魚、そして野ネズミなど、平原にふんだんにある。このコウノトリをビシュタット村では、村ぐるみで子育てに協力している。

261. 「シリーズ世紀末の饗宴 (1)画家クリムトの秘められた戦い」 [1998年12月18日・『新日曜美術館』・ETV・45分] 案内役：石沢典夫・森

口瑤子、ゲスト：池内紀（ドイツ文学者）・鶴岡真由美（ヨーロッパ美術史研究）。

名古屋市にある愛知県立美術館の常設展示室に、日本で公開されている絵としては二点しかないといわれるグスタフ・クリムト（1862-1918）の油彩画が展示されている。絵の題名は「人生は戦いなり」である。黄金の甲冑に身を包み、毅然と前に進む孤高の騎士が描かれている。これはあでやかな女性画で知られるクリムトには珍しい主題である。この絵を描いたときクリムトは41歳、実力を認められ、恵まれた後半生を歩むばかりであった彼に「人生は戦い」と言わせたものは何であったのだろうか。二人のゲストを迎え、一枚の絵を読み解きながら、19世紀末のヨーロッパの文化状況を立体的に想起していく。

⇒関連映像資料：「名画への旅：クリムト『接吻』」〔1992年12月27日・「日曜美術館」・ETV・45分〕

262. 「欧州通貨統合～「ユーロ」誕生への攻防」〔1998年12月11・18日・「海外ドキュメンタリー」・製作：イギリス・BBCほか、45分×2・ETV〕

ヨーロッパで1999年1月から、欧州単一通貨のユーロが導入される。そのユーロ実現に至るまでの歴史を関係者の証言をもとに振り返る。11日は、フランスのミッテラン大統領がEMU（欧州通貨同盟）の設立を提案するまでを追う。18日は、マーストリヒト条約締結後のEC各国の動向を探る。

## 参考文献

- 吉田 和比古「ハイパーテキストとしての『言語』と『映像』」『新潟大学教養部研究紀要』第25集 65-77頁 1993年。
- 吉田 和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第2号〕1-14頁、1996年。
- 吉田 和比古「メディア、あるいはファシズム(1) レニ・リーフェンシュタール論～」『法政理論』新潟大学法学会 第30巻第2号 1-27頁 1997年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(1) ドイツ戦後史の映像レファレンス～」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第2号 66-150頁 2001年。
- 吉田 和比古「メディア、あるいはファシズム(4)～現代の医療技術、内なる優生思想、そして生命の世紀へ～」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第4号 1-89頁 2001年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(2)～過去をまなごしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～」『法政理論』新潟大学法学会 第34巻第1/2号 22-61頁 2001年。
- 吉田 和比古「都市の記号論(2)ベルリン：日本のマスメディアのまなごし～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第8号〕167-180頁、2002年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(3)～映像は未来を予見する～」『法政理論』新潟大学法学会 第35巻第4号 22-61頁 2003年。